連載「大友時代を生きた人々」

国際文化学部鹿毛敏夫教授の「～ルイス・フロイス～日本を観察・熟知した宣教師」が掲載

●大分合同新聞朝刊　2021年1月15日(金)

大友時代を生きた人々

鹿毛　敏夫

日本を観察・熟知した宣教師

ルイス・フロイス

ルイス・フロイスは、ポルトガルのカトリック司祭・宣教師です。イエズス会士として16世紀の日本で宣教し、戦国時代のこの国を紹介した「日本史」を記しました。

1532年リスボン生まれのフロイスが深く関わった日本人の中で、大友義鎮（宗麟）は2歳年上、織田信長が2歳年下、豊臣秀吉が5歳年下で、彼らはほぼ同世代と言えます。慶長2（1597）年に長崎で病没するまでの65年間の人生のうち、ほぼ半分の31年間を日本で暮らしました。

1549年からおよそ1世紀の間に来日したヨーロッパ人宣教師300人の中で、フランシスコ・ザビエルに次いで知名度が高いのがフロイスです。ザビエルがわずか2年3カ月の滞在で「日本を駆け抜けた開拓者」的宣教師なのに対して、フロイスは「日本を観察・熟知した歴史家」的宣教師のイメージがあるでしょう。32歳で九州肥前の横瀬浦（長崎県西海市）に上陸するまでの前半生、フロイスは、ポルトガル王室秘書庁の書記官として素養を身に付け、ゴア（インド）の聖パウロ学院長やインド管区長の秘書として報告書を執筆したことで、その文才を磨いていきました。

30年以上に上る在日期間に、フロイスは日本の政治権力をどのように観察し、彼らとどう関わったのでしょうか。例えば、将軍足利義昭を奉じて入京を果たした時期（36歳前後）の織田信長について、フロイスは「甚だ清廉にして、協議では入念で、自らの仕事には完璧であり、人と話す際には遷延やくだした前置きを憎む」と記しています。

日本での宣教活動の最大の庇護者として、後にその実像以上の過大評価がカトリック世界に広まる大友義鎮とは、上長フランシスコ・カブラルの通訳としての立場で頻繁に接見します。フロイスと義鎮は、互いの邸宅を行き来して、デウスの教えの根源や教会礼拝の方法などを議論したといいます。

やがて義鎮は、49歳の天正6（1578）年に臼杵の教会でカブラルから洗礼を授かりますが、この頃の九州の諸大名権力は、従前に注力した対明外交から、新たなチャンネルを求めて東南アジア諸国王との外交交渉に傾倒した時期に相当することに注目する必要があります。九州の政治権力の外交方針が「中華」から「南蛮」へシフトする、まさにその時期の日本を直視したのがフロイスで、そこにザビエルとは異なる彼の特異性を見いだすことができます。

（名古屋学院大学国際文化学部教授）

＝月1回掲載＝

若い頃のフロイスが秘書として勤めた聖パウロ学院跡（インド・ゴア）